

終講のあいさつ

KASAHARA, Chizuru / カサハラ, チズル / 笠原, 千鶴

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

社会労働研究 / Society and Labour

(巻 / Volume)

12

(号 / Number)

4

(開始ページ / Start Page)

151

(終了ページ / End Page)

159

(発行年 / Year)

1966-03-19

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00017718>

終講のあいさつ

笠原千鶴

一

これより最終講義のあいさつを申し上げます。

諸先生、職員の方、ゼミOBの方、友人や知人の方々、御忙がしい所を御出席をいただき、ありがとうございます。

私は学校で教えるとか、学ぶとか、考えるとか、生きるということについて日頃考えていることを、少しばかり、述べて終講のあいさつに、かえたいと思います。

私は、最初にまづ、学生諸君に問題というか、宿題を出しておきたいと思えます。この宿題は皆さんの卒業まででもいいし、あるいは卒業後、三年、五年、十年、二十年かかってもいいから、ゆっくり、解いて、いただきたいのです。その宿題というのは次の三つであります。

第一は、米軍の北ベトナム爆撃について、最近の週刊朝日で小汀利得さんが中国はドロボウ、アメリカは警察。北ベトナムはもちろん、ドロボウの本家中国までたたくのは当然という意味の発言をしております。次に写真報道家の

田村茂さんの「みんなが英雄」という北ベトナムの写真集が最近、出ています。これがその本です。これについては「みんなが英雄」ではない。「みんなが暴徒」と見なさいという力が動いております。

北ベトナムは、向の岸の火事で、火の粉が日本人の頭の上に、ジカにふりかかってまいりません。次の第二、第三は日本人民の心の内の姿勢にかかわってまいります。

第二は、在日朝鮮人の民族教育は反日であるという見方です。また、南朝鮮では教科書にのっている独立運動の歴史の内、日本を刺戟する一部を書き変える企てがあるとのことであります。独立運動を日本人の内の誰に遠慮し、朝鮮人の内の誰が書き変えようとしているのでしょうか。(多少の説明があったが省略)

第三は、かつて、日本帝国主義が中国を侵略しました。その当時、中国の抗日救国運動を日本側は排日、侮日、匪賊と呼びました。今日、反動は中国が「高姿勢」だから、それに備えて日本は「防衛計画」を進めねばならぬと着々と事を運んでおります。昨秋、日中青年交流大会で数百の日本青年は数万の中国人民と腕を組んで武漢で上海で日韓会談反対の示威行進をしました。

問題というのは以上の三つであります。この問題に対応の仕方には、賛成、反対、無関心の三通りあります。無関心は保守とちがいます。青年学生の政治的無関心とはものを考える力、批判精神をぬきとり、「明日は明日の風が吹く」式の「イカレボンチ」をつくり出そうというのです。このような大きい社会風潮が動いております。この三通りの対応の仕方は学生にも教員にもあり、ここで大学のあり方、「教」と「学」と「生き方」「考え方」の問題にかかわってまいります。

学生諸君が在学している今日現在の日本の社会は政治、経済、文化のどの方面をとってみても、混乱、混沌、混迷どこから手をつけていいかわからぬ「ジャングル日本」といった姿になっています。光と闇が混在、格闘しています。このような図面は昔から、多くの宗教画や芸術作品の上に画き出されています。

いきなり「混迷」という形で、つき放した提起では、皆さんも迷惑されるでしょうが、やはり、始め「混迷」として受けとって下さい。そして自分の頭を使って、苦心して一面的でなく全面的に、皮相でなく、事物を追及し、そこから本質と真実をつかみ出してほしいと思います。例えば政治外交の面で日本はアジアの一員といいますが、そのいくつかの具体的あらわれを一つ一つしらべてみて下さい。経済貿易の内例えば中国貿易は政府が統制下に置こうとしたL.T貿易は後退して、日韓会談に反対する貿易団体がすすめた友好貿易が輸出高の第四位を占めています。アメリカ直輸入の経営学が、最近の倒産を防ぎえなかったとしてその破綻をいうのは浅薄ではないでしょうか。外国侵略の日本歴史の書き替えが一部で着々と進んでいます。文学や芸術の面でも『紛糾』がたえないようです。

特に、この「混迷」現象の中で、私共が注意しなければならないのは、日韓会談を機として、日本国民の内に、再び戦争責任の問題が発生してきているという事実であります。

戦後、当分の間、戦前責任、戦中責任、戦後責任という言葉が使われました。それがいつとはなしに下火となり、それに乗じて新しい戦争責任が形を変えて発生しています。昨秋、結成された日本民主主義文学同盟の運動方針の内に次のような指摘があります。個人的体験をこえて、侵略戦争の本質に迫った作品や、日本人民が侵略戦争に総動員

されていった歴史の総体を追及して、そこから普遍的な反戦の主題を引き出すといったような作品を創造するところまではなかなか、進み出ることができない弱さをもっていたというのです。これは作家の活動を支える日本人民の姿勢の問題であると思います。今度こそ、私共は正しく生きる道を見出し、その道をあゆまねばならないと思います。

私は学生諸君に、この与えられた「混乱」「混乱」を先にのべました三つの宿題を、テコにして、ゆっくりでいいです。それらの混沌を解きほぐす立場、考え方、見方を、また行動と生き方の方向をさし示してくれる立場を、心を労して探求してほしいと思います。

五年十年の間には、波浪の干満、高低はありましようが、ついに、行き止まることなく、途中で疲れが出ることのない見方、立場を追求してほしいと思います。

この探求の努力は国の政治、経済、文化の姿勢の問題にかかわります。同時にそれを支える自分の心の内の姿勢の問題にもかかわってまいります。

始めにのべた三つの宿題の解き方の内に、これから、どのような日本人を創り出そうとするのか。アジア、アフリカ、ラテン・アメリカの夜明けと共に日本人らしい日本人を、どうして創り出すかという問題が含まれております。これは日本国民の心の内の基地（スカルノルメンタル・ベース）に気付くかどうか。気付いたら、どうするかという問題であります。

中国研究家の竹内好さんが中国の会というのを作っており、その会の申し合わせの内に「世界の大勢から説き起こさない」という一項があります。私は、この申合せには、『それでは、どこから説き起すのですか』と問い返したくなるようなキザなもの一トひねりひねったものを感じています。先にのべた三つの問題から説き起こそうと、それは

自分の心の内の姿勢、かまえ、『精神的基地』の問題にかかわってまいります。自分を造りかえる作業にかかわってまいります。

私は考える学生の「考える」をこのように考えてみられないかと思っております。そして、大学という所が、この「考える」に適当な場所か、どうか。これから在学二年三年の間に、そのようなことを考えてみて下さい。

三

私は、ただ今、混沌というて、つき放した言葉を使うがと申しました。それでは、私は、これを、どうとも手のつけられない混沌、カオスとみているか、どうか。それについて、少しばかり自分の考えを申しのべておきたいと思えます。このことは、若い友人から出された、簿記の講義の外に生き方についても話さぬかという注文にも、一部、答えられるかと思ひ、数言であります。ふれておきたいと思ひます。

私は、唯今、こんな風に考えております。この混迷を見究め、解く力を以っている科学的な考え方、観点、立場があると考えております。この考え方、見方を唯物弁証法といたいと思ひます。

一つの観点に立ち、それによって行動し、行動、実践の成果をあかしとしてそれまでの立場を点検、批判し、今迄の立場を高めてゆきます。これは個人の上にも行われます。また民主団体でいいますと学習―活動―活動―学習とか実践・総括・実践といわれている進め方はこれであると思ひます。

この考え方は人民の哲学、働くものの学問であります。哲学というと書齋の内で育つように考えられがちですが、そうではありません。

四学年生の諸君も、私も、近く、この外濠の学び舎を去ってゆきます。他の学生諸君は二年間、学校にあって勉強できます。就職という当面の問題に、直接、ひびいてまいらないかとも思いますが、今年一九六六年という年を、どう迎え、どう送られますか。最初、申上げた三つの宿題の解き方にも関連します。

六五年はベトナム問題と日韓問題に暮れ、六六年はキューバの三大陸人民連帯大会に明けました。「世界の大勢から説き起し」ていますが、国内の各界各層の動きは、国際的潮流の国内的あらわれとして起っております。このことは進歩陣営でも、反動陣営でも同じであります。いわゆる混迷の根源は新安保体制にあります。今日までの五年乃至三年の国際、国内の運動は、その日その日が烈しい怒濤の連続でありました。六六年という年は、その積み重ねが一挙に集中してあらわれそうな気配であります。七〇年問題を六五年から六六年にかけてくりあげて問題化しているといわれるのは、このことだと思えます。

この状況に応じて進歩勢力は国内的にも、国際的にも大きく団結して、内外の反動勢力に抵抗して戦線をすすめるでしょう。国際連帯の運動が、独立、平和、民主の運動と結びつつ進展するでしょう。今日のように深く国際連帯を感じとれる条件は私共の青年時代にはありませんでした。唯今、開会中の三大陸人民連帯大会の経過と成果を注意しましょう。それらを日本人民はどう受けとめるか。自分はどう受けとめるか、自分の心の姿勢を点検しましょう。

四

最後に、少しばかり、わたくし事についてのべさせていただきます。

私にとって、この富士見町という町、この靖国神社の周辺は、不思議に縁の深い場所でございます。私は十二歳の

時、今の尋常六年の二月十一日、当時の紀元節の朝、家出をして上京、当時中央線のの終点の飯田町駅（今は荷物駅）のホームでおまわりさんに呼びとめられて、警察につれてゆかれました。そこが、今の東校舎の前を靖国神社の方に行って左角にある警察でした。その西側の畳の部屋におかれました。窓の所に高い杉の木が立っていました。今はなくなってありません。私の家はそう、ゆたかでなかったので、金持ちになろうと思ったのです。さげていた小さい風呂敷包みの中には、『実業之日本』（森村市左衛門や甲州出身の雨宮敬次郎の出世物語りなどが毎号出ていて愛読していました）数冊、ソロバン、終りの頁一面が求人広告ののっている時事新報（これは予め、この新聞をとっている村の人を見つけておいて、そこから数日分を借りました）などがはいつていました。数日いると父が迎えに来ました。「あなたは子供をセッカンしたのか」と聞かれ、父が何か涙声で答えたのを覚えています。数日東京見物をして家に帰りました。この時のフロシキ包みに大玉のソロバンが入っていました。それから数十年たって、そこから一キロの近くの場所で、やはりソロバンの話しをして最終講義。面白いメグリアイです。

それから中学にはいりました。中学を出る頃から隣村出の日本力行会会長にたより、米国行か南米行を志しましたが、当時、排日運動が盛んでスグには渡れません。そこで小学校の代用教員を二年やりました。その間にどうせ、金持になるなら金持ちになる学校へというので東京高等商業学校に入学しました。学資はないが、一橋に入れば、学資はどうかなるといふ無鉄砲ぶりでした。

この卒業論文はシルレルの「美魂について」というのでした。仏教でいうと「悟り」とか「救い」ということに当ります。始めゼミナールの三浦新七先生は聖オーガスチンの「懺悔録」かシルレルかどちらかがテーマにいいのではないかといわれ、双方を若干しらべて、シルレルにしました。

この頃は吉野作造、福田徳三などの学者たちが作った黎明会の講演も聞きに行くが、一燈園の話しも聞きに行きました。「貧乏物語」を読むが「三太郎の日記」や「出家とその弟子」も読みました。卒業前か、後か、詳しくは忘れましたが故杉本栄一氏や山中篤太郎氏たちが作っていた一橋のSPS（社会思想の会）に参加し、その労働学校の講師に出ました。教室は芝公園の総同盟の建物や神田の三省堂の裏にあった公共建物があてられていました。

「わが思想は金なきに因する如し、秋の風吹く」という啄木の歌がありますが、今日の私としてはこの句の前半分はこれでいいとして、後半は秋風が吹いても困るし、春風では、なお、まずい。この風の所だけは、心のシャンと決まる他の明るい言葉はないものかと思えます。

私は一時、牧水の「幾山河、こえさりくれば淋しさの、はてなむ国ぞ、今日も旅ゆく」という歌のゴロを好んで、その木彫りを、書齋におき、今も、ブラさげてあります。

始めの句はいいが、淋しさのはてなむ国はいけません。今日も努力と求道の旅をゆくならいいが、さすらいの旅ではいけません。この木彫りを外そうかと思いましたが、まアまアと思って今もかけてはあります。外ずしてもいいのです。

山河を歌うなら河上肇さんの「たどりつき、ふりかえりみれば、山川をこえてはこえて、来つるものかな」がいいと思います、私はその感慨を好きに思っています。

しかし、今、日本人民は重畳たる山と川とを前途に控えています。これらの幾山河を「混沌」と見ていませんか。けわしくとも越えねばならぬし、越えることが必ずできます。人民の立場と考え方は、仏画でいうならば、混迷邪悪を照す「照魔の鏡」であると同時にこの鏡は人間の尊厳を汚すものを破る「降魔の剣」であります。日本を幸せな国

にするための大路線の内に、自分の年令、能力、条件に応じた一つの持場をもらい、そこで、努力、学習、活動をすすめてゆきたいと考えております。そうした生き方に喜びというか、生き甲斐というか、心の張りを感じております。

そして、一度、心のひまを見つけ出して、学生時代、皆さんの年頃、「安心立命」ということを考えてみたことがあるが、その境地と、最近芝居でみた「紅岩」映画でみた「不屈の人々」(原題は烈火中永生)の境地と結びつくかどうかを、考えてみたい。それは心の重い仕事であります。また、たのしみでもあります。

これを以て、最終講義のあいさつを終わります。